

【旧約聖書日課】出エジプト記 12章21～27節

²¹モーセは、イスラエルの長老をすべて呼び寄せ、彼らに命じた。「さあ、家族ごとに羊を取り、過越の犠牲を屠りなさい。²²そして、一束のヒソブを取り、鉢の中の血に浸し、鴨居と入り口の二本の柱に鉢の中の血を塗りなさい。翌朝までだれも家の入り口から出てはならない。²³主がエジプト人を撃つために巡るとき、鴨居と二本の柱に塗られた血を御覧になって、その入り口を過ぎ越される。滅ぼす者が家に入って、あなたたちを撃つことがないためである。

²⁴あなたたちはこのことを、あなたと子孫のための定めとして、永遠に守らねばならない。²⁵また、主が約束されたとおりあなたたちに与えられる土地に入ったとき、この儀式を守らねばならない。²⁶また、あなたたちの子供が、『この儀式にはどういう意味があるのですか？』と尋ねるときは、²⁷こう答えなさい。『これが主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである』と。』

民はひれ伏して礼拝した。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 9章23～28節

²³このように、天にあるものの写しは、これらのものによって清められねばならないのですが、天にあるもの自体は、これらよりもまさったいけにえによって、清められねばなりません。²⁴なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。²⁵また、キリストがそうなされたのは、大祭司が年ごとに自分のものでない血を携えて聖所に入るように、度々御自身をお献げになるためではありません。²⁶もしそうだとすれば、天地創造の時から度々苦しまねばならなかったはずですが、ところが実際は、世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。²⁷また、人間にはただ一度死ぬことと、その後にかきを受けることが定められているように、²⁸キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章10～25節

¹⁰十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。¹¹彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっていた。

¹²除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、「過越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか？」と言った。¹³そこで、イエスは次のように言って、二人の弟子を使いに出された。「都へ行きなさい。すると、水がめを運ん

でいる男に出会う。その人について行きなさい。¹⁴その人が入って行く家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』¹⁵すると、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、そこにわたしたちのために準備をしておきなさい。」¹⁶弟子たちは出かけて都に行ってみると、イエスが言われたとおりのだったので、過越の食事を準備した。¹⁷夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。¹⁸一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。」¹⁹弟子たちは心を痛めて、「まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。²⁰イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。」²¹人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」

²²一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」²³また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。²⁴そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。²⁵はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

あなたと子孫のための食事【こども説教のために】

今日も、礼拝堂の聖壇には、「聖餐」の準備が整えられています。キリストに結ばれて生きる者として、洗礼を受けている者は、「主の食卓」から「パンと杯」にあずかります。

わたしたちの教会では、毎月第一日曜日に加えて、祝祭日や記念日の礼拝で「聖餐」を祝っています。年間15回ほどです。けれども、教会では元来、毎日曜日に集まるたびに、「聖餐」が祝われていました。

主イエスの弟子たちは、礼拝を安息日（土曜日）のユダヤ会堂で続けていました。主イエスのご復活の後、弟子たちの教会は、日曜日に「食事のために集まる」（I コリ 11:33）ようになったのです。もちろん、ただの会食ではありません。主イエスが最後の食事の席で「わたしの記念としてこのように行いなさい」（I コリ 11:24）と命じられたとおりの儀式として、食事をするために集まったのです。それは、「主の晩餐」と呼ばれましたが、わたしたちは「聖餐」と呼ぶようになっていきます。

「主の晩餐」は、主イエスが弟子たちと記念した「過越の食事」を受け継いでいます。「過越の食事」は、親から子へ、子から孫へと、代々受け継がれてきた食事の儀式です。わたしたちは、「主の晩餐」として主イエスがお定めくださった食事の儀式を、子どもたちへ、孫たちへと受け継いでいくのです。

一緒に食事をしている者が!?

今から 76 年前の 1946 年、世界基督教聯合会（世界教会協議会 WCC の前身）が世界中の教会に一つのことを呼びかけました。10 月最初の日曜日に、世界中の教会で「聖餐」にあずかり、キリストによって一つであることを確かめよう、という呼びかけでした。前年（1945 年）まで、ヨーロッパとアジアの全域、そしてアフリカの一部を巻き込んで繰り広げられた第二次世界大戦を、世界中に広がるキリスト教会は、食い止めることができずにいたのです。教会自体が、国や地域ごと、また教派ごと、互いに対立が続いていて、一つになることができなかつたからでした。「世界聖餐日」は、そのようにして始まりました。

同じことが今も繰り返されていることを目の当たりにしながら、今年の「世界聖餐日」を迎えました。76 年前の最初の「世界聖餐日」を記念した先達のうち、今年も共に記念する者はごくわずかでしょう。世代は進み、「世界聖餐日」は孫の代まで受け継がれてきました。残念ながら、最初の「世界聖餐日」を呼びかけた先達の思いは、必ずしも実現していません。キリスト者と諸教会の一致は、確かに大きく進みました。けれども、それによって、国や民族の対立、紛争、そして戦争をすべて食い止めることは、できずにいるのです。

76 年前に先達が「聖餐」に込めた思いは、確かにわたしたちすべての者が互いに和解し、一致することでした。食事の儀式は、確かに、わたしたちの和解と一致を指し示します。共に食事をするができる関係こそ、互いに和解し、一致していることを示すはずだからです。

わたしたちは、確かに、食事を共にできるかどうかで、人との距離を測っているのです。日常的な食事は、家族や本当に親しい者同士でなければ、共にしません。だからこそ、親しくなろうとして、敢えて食事の席を設けることもあります。あるいは、わたしたちが互いに親しい者同士であるべきだということを確かめるために設けられる食事の席もあるでしょう。儀礼的な食事であれば、そのような意図が隠されることはありません。

わたしたちの祝う「聖餐」は、確かに、食事の儀式です。ある意味で儀礼的な食事です。たとえ現実には互いに親しくない関係であっても、その食事に共にあずかるとき、互いの関係を近いものにしようとしています。同じ食卓に、敵意を抱いた者が含まれていようと、そうしているのです。

確かに、主イエスが弟子たちとあずかられた最後の晩餐の席には、イスカリオテのユダも同席していました。主イエスは、彼を排除することはありませんでした。それどころか、その彼をもご自分の食卓に着かせ、同じ器から食べさせ、ご自身の「パンと杯」にあずからせたのです。食事の後に、彼との関係が破綻するとしても、主イエスは、そうなされたのです。

それでも食事の準備を！

わたしたちのあずかる「聖餐」には、わたしたちだけでなく、ユダも招かれているのです。いいえ、わたしたちこそ、ユダの一人なのでしょう。主イエスを裏切って、主イエスとの結びつきを自ら断ち切ってしまう者。主イエスを、別の何者かの手の中に引き渡してしまう者。そのようなことを一度たりともしたことがない、と神の御前で誓える者は、一人もいません。

それでも、わたしたちは、「聖餐」にあずかります。招かれているからです。主イエスに招かれているからです。代々の先達から受け継いだこの食事の儀式を、「記念として行いなさい」と、わたしたちも命じられているからです。

皆さんの中にいらっしゃるかわかりませんが、わたしが牧師として聖餐を執り行ってきた中でも、ときに「聖餐」を避けられる方があります。「聖餐」のある礼拝に来ることを避けられたり、「聖餐」の「パンと杯」にあずかることを避けられたり、という方が、時折いらっしゃいました。もしかすると、聖餐司式者が気に入らなくて避けられるという選択をされていた方もあるかもしれませんが、聖餐を避ける理由を「自分は聖餐にあずかるのにふさわしくないから」と説明してくださる方もありました。わたしたちの教団が用いる簡易的な「聖餐」式文で、「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は主の体と血に対して罪を犯すこととなります」(I コリ 11:27) との聖句が告げられていたからでした。ご自身がキリストを裏切って一週を過ごしてしまったと悔いて、「自分は聖餐にあずかるのにふさわしくない」と考え、聖餐を避けてしまわれていたのです。今は、この聖句を含む式文部分を用いない場合が少なくありません。

ユダは知らなかったのです、自分と同じように裏切る者が他にもいることを。ペトロも、ほかの弟子たちも皆、主イエスを捨てて離れて行きました。結びつきを絶って、主イエスを別の何者かの手引き渡してしまったということでは、すべての弟子が「ユダ」でした。ユダは、だれもが自分と同じ「ユダ」であることを、どこかで知ることができなかつたのでしょうか。

わたしたちは、皆、「ユダ」です。「十二人のうちの一人」です。それでも、なお、招かれてきました。今日も招きに応えて、主の食卓にあずかろうとしています。赦されているからです。

そうであればこそ、わたしたちは、主イエスをご自分の食卓にわたしたちをお招きくださっているように、わたしたち自身の食卓に、人を招くのです。誰であっても、主が招かれる人を、わたしたちも招くのです。たとえその人が敵意を持ち、わたしを打ちのめそうとしているとしても、です。招かれて来る者も、命がけで来るのです。招く者も命がけで招けばよいのです。そこで命が絶たれようと、そこから赦しと和解の福音が告げられるでしょう。